PRONEWS2014 年 5 月掲載

Avid® Media Composer®

～オフラインからオンライン編集まで幅広く対応する魅力とは～

アビッドは、NAB2014 で Media Composer にサブスクリプションライセンスやフローティングライセンスを提供することを発表した。注目はサブスクリプションライセンスだ。バージョン 7 で大幅な値下げが行われたのに続いて、月単位の契約の選択などによってさらに導入の敷居は低くなると予想される。そこでこれからますます注目の集まりそうな Media Composer について、今一度その魅力を紹介をしよう。

■オフラインからオンライン編集まで現場に幅広く対応

まずはラインナップから見てみよう。現在、アビッドの編集 / フィニッシング系ソフトのブランドは Media Composer のみで、I/O ボックスとの組み合わせなど 3 種類のモデルがリリースされている。最小構成はソフトウェアのみのバージョン。特にソフトウェア版は、Final Cut Pro からの乗り換えを検討している人たちから高い注目を浴びている。Media Composer には Mac 版があり、操作性は Final Cut Pro と類似点が多数あること、AMA 機能を使えば FCP のメディアである ProRes も使用可能である点などが、Final Cut Pro ユーザーの関心を引いているところだ。SDI 接続やモニタリング、テープへの書き出し環境が必要な場合には、Avid の I/O ボックスを導入することによって対応が可能だ。

Avid 純正の I/O ボックスには 2 種類あるが、上位モデルの「Media Composer | Nitris DX」は、DNxHD や AVC-Intra のエンコーダー / デコーダーチップの搭載や RGB4:4:4 のデュアルリンクにも対応しており、リアルタイムレスポンスやオンラインレベルの画質を実現しているのが特徴だ。Nitris DX ほどの多機能でなくていいといった場合には、「Media Composer | Mojo DX」と呼ばれる小型のブレークアウトボックスもリリースされている。デジタルのキャプチャやモニタリング、出力が可能で、ノートパソコンで運用したいといった用途にも最適なモデルだ。アビッドというと純正の I/O しか対応していないと思われる人もいるかもしれないが、Media Composer は AJA や Blackmagic や Matrox といったサードパーティー製の I/O にも対応している。すでにこれらの I/O を導入しているというユーザーや、できるだけ少ない投資でビデオ I/O を実現したいという人にはポイントの部分だ。

●Media Composer は I/Oとの組み合わせによって幅広い現場で活用される

Media Composer は
ソフトウェア単体でも使用可能。
オフライン編集などに使用できる

Mojo DX には、
HD-SDIのインとアウトが 1 ペア装備

AJAなどコストパフォーマンスの
高いハードウェアを使用可能

■共有ストレージで作業効率が上がる

アビッドは、ネットワークを使った共有ストレージの開発も自社で行っている。その共有ストレージは、優れた協調作業が特徴で Media Composer を使ったワークフローにはなくてはならない存在となっている。番組制作の現場というのは 1 台の PC ですべての作業が終わるということはなく、周りのいろいろなシステムの相互によって作られている。また、クライアントの編集機が 2 台や 3 台とわずかな台数であっても各編集機が個別にプロジェクトやビンを作ってしまっては作業の混乱を招いてしまう。

協調作業は、やはり共有サーバを導入してメディアを共有するのが適切な方法だろう。アビッドは ISIS と呼ばれる共有ストレージをリリースしていて、Media Composer を使ったクライアントはビンやプロジェクトを共有でき、同じメディアに同時アクセス可能といった協調作業ワークフローを実現している。共有サーバは、少し前まで規模や導入コストの問題で敬遠されることが多かったが、今ではクライアントが 3 台以上になったら真剣に考慮していいソリューションになってきたともいえるだろう。

エディターが個別のマシンでプロジェクトやビンを
作ってしまうと、整理できない

●共有ストレージをつかっていない場合

複数のエディターが、ビンやプロジェクト全体を
ワークスペースに置いて共有できる

●共有ストレージをつかっている場合

■映像編集と MA の連携がスマートに行える

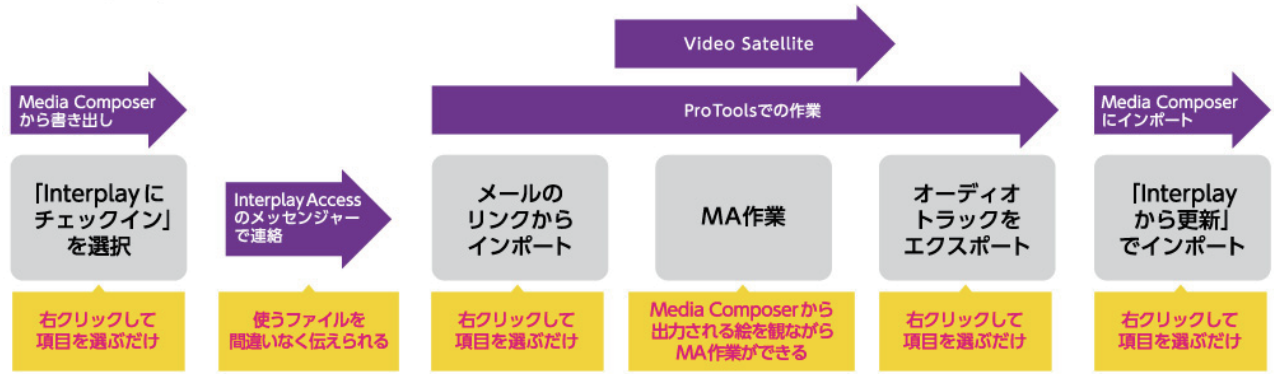
アビッドのソリューションの魅力といえば、ソリューション間でのスマートな連携を実現している点だろう。ポストプロダクションにはビデオ用のソリューションのほかに MA 用のソリューションを導入しているところも多いと思うが、通常その間でデータのやり取りの際には送り先に対応したフォーマットに変えなければいけない。例えば、Media Composer と Pro Tools とのやり取りは、AAF ファイルで可能だが、Media Composer で AAF を書き出す際にはいろいろ設定をしなければいけないし、Pro Tools では送ったファイルを選択してインポートしなければいけない。工程ごとにいちいち手作業で選択や設定を行わなければいけないのが現状だ。

●Interplay | Productionを使っていない場合のMA作業

アビッドの場合は、こうした煩雑なやり取りの部分を「Interplay | Production」と呼ばれる制作管理ソリューションで解決することが可能だ。例えば、Interplay | Production が導入されている場合、Media Composer のオペレーターは送りたいシーケンスを右クリックして、「Interplay にチェックイン」という項目を選択するだけだ。データのコピーも必要ないし、プロジェクトファイルの変換作業も必要ない。チェックインが完了すれば、ファイル名に行き違いがないように専用のメッセンジャーを使用し、Pro Tools 側に連絡をすることも可能だ。Pro Tools 側では、受信したメッセンジャーに記載されているリンクを右クリックして「Pro Tools にインポート」という項目を選ぶだけで Pro Tools のシーケンスに読み込みができる。

Pro Tools で音が完成したら「選択したトラックを Avid Interplay のシーケンスへ」を選択するだけで Media Composer に返すことができる。Interplay | Production が更新されたら、Media Composer は該当シーケンスを右クリックして「Interplay から更新」の選択だけで最新の状態にアップデートが完了だ。Interplay | Production を導入しているとほとんどのやり取りはメニューから機能を選ぶだけだ。インポートとエクスポートに面倒な設定やファイルの選択といった作業が発生しない。シンプルかつ間違いない 2 者間のやり取りを実現しているところはさすがアビッドといった感じだ。

●Interplay | Productionを使った場合のMA作業



■トランスコードなしに直接アクセスや編集ができる

今の映像業界はファイルベースの時代といわれているものの、異常といえるほど増加したビデオフォーマットの種類やトランスコードといった面倒な作業に悩まされている人も多いと思う。Media Composer の場合はそういった問題に悩まされることはなく、ほとんどのビデオフォーマットをトランスコードなしに直接アクセスや編集が可能だ。例えば番組制作の現場ならば、一般視聴者が iPhone で収録した映像を使う機会があるだろう。

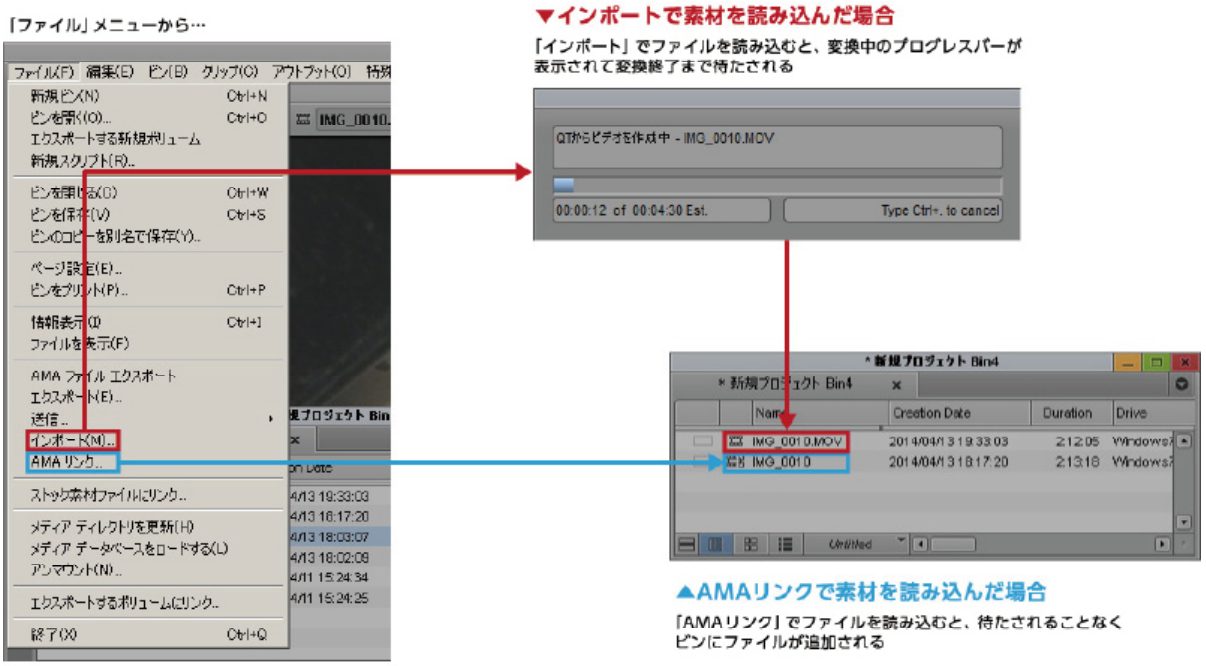
H.264 を Media Composer で扱う方法は 2 つあり、1 つはファイルメニューからインポートをする方法だ。この方法は、素材の数がとても多い場合はフォーマットの変換時間がかかってしまうという欠点がある。もう 1 つは、AMA と呼ばれるプラグインアーキテクチャを使用する方法だ。AMA はインポートするのではなく、映像とリンクをして再生や編集をするという機能だ。ビンの中で右クリック、または、メインメニュー→「ファイル」メニューから「AMA リンク」を選んで取り込みたい映像を選

択すると、その映像がビンの中に現れる。インポート作業のように待つ必要がないので、タイムライン上に並べて即編集が可能だ。素材の数が多い場合にはどんどん AMA リンクをして素材の中身を確認して、後からほしいものだけのフォーマットを変換するという使い方もありだろう。

XDCAM を Media Composer で使う場合も H.264 と大きく変わることはない。ソニーの「PDW-U2」という PC で再生可能な XDCAM ドライブを USB で編集機に接続して、プロフェッショナルディスクをドライブの中にセットすると、Media Composer はメディアのセットを認識して、自動的にビンを立ち上げてくれる。XDCAM にある「モデルタイプ」や「プロキシ AV データ」といったクリップに付属するメタデータも Media Composer が自動的に取得してくれる。4K の XAVC であっても AMA で対応が可能で、オリジナルのメタデータを維持しているのも特徴だ。

AMA は、QuickTime や AVCHD については対応プラグインが標準でインストールされている。しかし、それ以外の各フォーマットは、各カメラベンダーからプラグインをダウンロードする必要がある。XDCAM や AVC-Intra、XAVC など大半は無料でダウンロードが可能だ。将来、新しいフォーマットが登場しても、リリースされたプラグインをインストールすることで対応することができるだろう。

■総括



Media Composer は、個々の機能よりもスムーズなワークフローを実現できるところが特徴だ。入り口の広さや出口の広さがありながら他のソフトより確実に受け渡しを実現しているといったところだ。例えば AAF への対応を謳っている編集ソフトはたくさんあるものの、きちんと整合性が取れているというものは実は少ない。Media Composer は高いデータ互換性を実現していて、それがワークフローをきちんと成立させている要因にもなっている。エディターというのはどうしても編集ソフトの機能ばかりに目がいってしまいがちだ。ワークフローもエディターにとって大きなメリットであり、注目すべきポイントのはずだ。いろんなマシンがつながり「連携作業をしましょう」というときに、ワークフローがきちんとスムーズに進むということもプロの現場にとってはものすごく大事なことだではないだろうか。Final Cut Pro からの乗り換えを検討している人は、そのあたりも考慮して選んでみてはいかがだろうか。

(PROEWS 2014 年 5 月掲載)

詳細は、avid.com/JP/products/family/Media-Composer をご覧ください。